

昭和あるいは戯れるイメージ

評・三浦 佑之 (古代文学研究者
立正大教授)

敗戦を境にして人はどう変わったのか、変わらなかったのか。年齢や職業や立場によって戦争や天皇に対する思いはずいぶん違うらしい。私の父は、召集されて中国東北部に送

戯れながら紡がれる戦後

制大学に進学して東京へ出る。その1年生の時に見たのが『青い山

するのは、14歳で敗戦を迎えた少年「かれ」と80歳を迎えた「わたくし」とであり、その二人のことは絡ませてつづられる「戯れるイメージ」とても説明するのがよいか。

東北の大きな街で生まれ育った少年は、学制改革後の高校生となり新制大学に進学して東京へ出る。その1年生の時に見たのが『青い山脈』だったが、「かれ」が心を躍らせた映画の、底抜けとも言える明るさはどこからくるのか。直前に行われた学制改革の影響が見えないのはなぜか。若い女教師島崎雪子や校医の沼田にみられる、民主的な思考はいつどのように養われたのか。映画のどこにも戦争の陰が見られないのはなぜか。

湧きだしてくる思いを、「かれ」と「わたくし」とが絡まり戯れながらことばを紡いでゆく。同じ年に刊行された『きけ わだつみのこえ』についても、同じように問い続け、特攻隊員となって散っていった若者たちの心と魂とに迫ろうとする。

相反する二つの作品を絡ませ、二つのことばを絡ませて、40年代後半という時代を鮮やかに浮かび上がらせる。読み終えると原節子が見たくなり、DVDを手に入れ鑑賞した。

◇あさぬま・けいじ 1930年、岩手県生まれ。成城大名誉教授。



水声社
2800円

られたのち無事に帰還し、玉音放送を聴いたのは腹を下して練兵場から家にもどっていた時だったが、戦争が終わったのを知ったとたんに元氣になり、兵営に私物を取りに行ったと言って母はいつも笑っていた。

本書の著者は、14歳で敗戦を迎えた。その時から数年間の思考と体験を、今井正監督の映画『青い山脈』と戦没学徒兵の手記『きけ わだつみのこえ』（どちらも1949年）とをテキストとして語ってゆく。むしろ、方法としての語りここにあり、美学と映画理論を専門とする研究者が、自らの思い出を懐かしむような野暮をするわけがない。本書に登場